



## 繰り返し起きる広域行政や合併構想

大紛糾した長尾村との合併再燃、結局見送りへ

昭和十七年に起きた長尾村との合併話は、世界大戦の激化などから消滅したが、この話、伊丹市と神津村の合併が実現した翌年の昭和二十三年九月になって再燃する。それは当時長尾村に属していた荒牧、鴻池、萩野、大野など伊丹市の隣接地区が、長尾村長に伊丹市への合併を要望する文書を提出したことがきっかけとなった。

六・三義務教育制ができ、中学校を新設しなければならなかったが、小さな村は財政的にゆとりがなく、合併という方法を考えざるをえなくなってきたときである。

この長尾村に対しては、同二十三年十二月、川西町（現川西市）や小浜村（現宝塚市）が「北部都市建設構想」をもって、合併を申し入れたこともあって、長尾村内の意見は多岐に分かれて混乱を重ねた。おおまかにいうと、阪急宝塚線の沿線地区は、小浜村または北部都市建設賛成派、伊丹に近い南の地域は伊丹への合併派ということになった。

村民たちは同二十四年二月、村民大会を開いて論議。この結果、わずかな差で伊丹市への合併反対を決議した。しかし

区は、伊丹市と隣接していたこともあって「水が貰えなくなったら井戸を掘る」と決意して伊丹市へ編入した」というエピソードが残っている。

### かつては尼崎、伊丹、川西の三市と猪名川町の合併話

昭和三十二年には伊丹、尼崎、川西の三市と猪名川町を加えた三市一町の合併話が出て、連絡協議会や合併調査協議会をつくって研究、検討したが燃え上がらず、四十年代末には、自然消滅してしまつた。また同時期に阪神六市一町広域行政都市協議会もでき、広域行政を考えたが、これもなにか一つ実らないまま過去の話になった。

だが、今また自治体の再編、いわゆる市町村合併話が出てきている。伊丹、宝塚、川西の三市と猪名川町の三市一町の合併話もこの一つ。合併にはプラス面もあればマイナス面もある。今回の合併話は、まだ各市の議会や市民レベルでは真剣な論議にまで発展していないが、ここで今一度、過去の合併話をたどり学ぶのも必要、と考へて簡単な紹介を試みてみた。現在の合併話が今後、どう展開するか、予測はつかないが、今いえるのは「どんな市域になろうとも、要は住民の幸せの向上のために、役立つものかどうか」が判断の基準になるといふことだ。

めて長尾村に合併を申し入れた。これがまた長尾村の南北対立の火に油を注ぐことになった。

### 県に分村合併案で解決へ

伊丹市と宝塚市の二市から合併話を持ち込まれた長尾村は、村議会や村民との話し合いでなんとか解決しようとしたが、どの会合も殺気だった雰囲気になり、長尾村だけでなく伊丹、宝塚両市も手がかりをなくし、県に相談するしかなかった。

そこで県は、解決策として①三十年三月十日をもって長尾村は、宝塚市に編入する。②宝塚市は、四月一日に市議会を開いて荒牧、鴻池、萩野、大野地区についての境界変更を議決、これらの地区を分村して伊丹市に編入するという案を示した。三者は、この案を飲み、三十年四月一日、最初に合併話がた昭和三十七年以来十三年ぶりに分村合併という異例の方法で解決した。

現在宝塚市になっている丸橋、口谷地区にも伊丹市への合併を望む声があったが、親村の山本地区に水利上、世話になっていることから山本地区に同調して宝塚市へ、水利上、同じ立場だった大野地

二日後に開いた村議会は、反対に伊丹市への合併を可決してしまった。これに対し、伊丹市への合併に反対する村民は、この議決を「民意を踏みにじつたもの」として二回にわたって議会解散請求をし、これが成功して同五月に議会解散が決定、伊丹市への合併話は白紙に戻った。

### 長尾村、南北村民の対立激化

伊丹市と長尾村の合併話は、もめにもめたあげく一旦白紙になったが、このあと長尾村では村長の辞任、新村長の就任、村議会の選挙などが同二十八年まで続いたこともあって大混乱、南北の対立は深刻化していった。

一方、川西町とともに長尾村に合併を申し入れていた小浜村は、二十七年三月、宝塚温泉、宝塚遊園地の名前をもらって宝塚町とし、二十九年四月には、良元村と合併して宝塚市に発展した。この間の同二十八年九月、国は町村合併促進法を実施、県は町村合併推進本部を設けて合併を進めた。当時宝塚市の人口は約四万人。長尾村の約一万人を加えると国が「市の規模として望ましい」という人口五万人に達することから、翌三十年一月、改